

今昔物語集の断定の助動詞ナリの周辺

——ニアリ・ニテアリと——

櫻井光昭

一

筆者は、「今昔物語集助動詞一覽(一)」——『なり』(断定)——『學術研究第三〇号』で今昔のナリの素描を試み、また、「今昔物語集に見るダの源流をめぐって」『国語学第一三二集』において、前稿の所説を發展させて、ナリからデアル(ダ)への転換の原動力となった「感覺的に現象を認識し、判断する意を表すニテアリ」が今昔当時愛用され、と同時に、ナリとニアリの用法が否定表現を中心に相補分布する状況が、強調的断定表現の用法へ転化していったニテアリ(デアリ)(デアル)を容易にその体系に組み込んでいったであろうことを指摘した。右の小論のうち、前者を前稿、後者を別稿と便宜上、呼ぶことにする。前稿・別稿いずれにおいても、今昔のニテアリ、およびナリとニアリの用法の相補分布について部分的に述べたので、今昔九卷についての実態を詳説したい。

二

テキストは日本古典文学大系本により、その中で、鈴鹿本を底本とした卷二、五、七、九、一〇、一二、一七、二七、二九の九卷を主要なものとする。なお、表記等は私意に依ることがある。まず、ニテアリに触れ、次に、ナリとニアリに触れる。なお、アリが敬語化したものも同列に扱う。

今昔のニテアリは、原則として肯定的表現に用いられることが多く、ニテは本来、「という状態で」という意味を持っている。

別稿において、筆者は、今昔のニテアリの用法を、次の三種に分類した。

- 1 『源氏物語』などのニテアリに近いもの
- 2 移行的なもの
- 3 ナリに近いもの

このうち、今昔のニテアリとして最も特徴的な用法は、2 移行的なものである。このニテアリは、

自己の視覚・聴覚・触覚など感覚によって、現象を確認し、判断するもので、「(自分の感覚で) 確認したが、まさしく……である(という状態である)」

の意を表す。今かりに、このニテアリを感覚的判断のニテアリと呼ぶ。そして、視点を右の三分類とは変えて、I 感覚的判断のニテアリとII それ以外の状態あるいは判断を表すニテアリに二分して、分析してみよう。用例はすでにあげたものは、ある程度避ける。

I 感覚的判断のニテアリ

確認手段となる感覚は、視覚・聴覚・触覚等である。多くの場合、見レバ、聞ケバ等の語が附随する。

① 視覚によるもの

僧遙ニ見レバ、一人ノ人、火ノ中ニ有リ。云フ事不能シテ只叫ブ。其ノ形、其ノ人ト不可見知ズ。只血肉ニテノミ有リ。見ルニ心迷テ怖シキ事无限シ 今昔七一一九

次の用例も、実地に主人公が寺を訪ねて見ているのであるから、「見れば」の類はないが、視覚によるものである。

玄落、其ノ後、彼ノ道明ガ有シ寺ノ帷ヲ思エケレバ、其ノ寺ニ行テ尋ネケレドモ、僧一人モ不住ズ、本ヨリ荒タル所ニテナム有ケル。 今昔七一三二

次の場合も、視覚によるものである。

然レバ、此レヲ帷ムデ 尺許擡キ堀テ見レバ、底ヨリ水湧出ヅ。「此レ、奇異ノ事也」ト思テ、忽ニ方三尺許、深サ□尺許堀ダレバ、実ニ出ル井ニテ有リ。 今昔一二二二

そのほかの視覚によるものの用例の所在を巻序説話番号によつ

てあげておく(以下同)。

九一二四、一〇一八、一〇一八、一〇一七、一二一七、一二一三、一七四二(ニテ在マス)、二七一三、二七一三、二七一三、二七一三、二七一三、二七一三、二七一四、二七一四、二九一三、二九一九、二九二三、二九一三、二九一五(全二三例)

② 聴覚によるもの

尼、此ヲ聞クニ、夫ノ故祥蓮ガ音ニテ有リ。

次の用例も、「もの」の姿は見えないので、聴覚によるものであることがわかる。 今昔一七三二

……、丑ノ時ニ成ヤシヌラムト思フ程ニ、物ノ足音シテ来ル。「此レナメリ」ト思フニ、御燈油ヲ取ル重キ物ノ足音ニテハ有レドモ、躰ハ不見エズ。 今昔二七一〇

次の用例も、夜半に主人公が物音で様子をうかがっているのであるから、「(まさしく) 盗人にてありければ」の意で、聴覚によるものである。

然て夜半ニハ過ヤシヌラムト思フ程ニ、門ヲ押ス音ノシケレバ、貞盛、「此ハ盗人ニヤ有ラム」ト思テ、調度擡負テ、車宿ノ方ニ行テ立隠レヌ。盗人ニテ有ケレバ、大刀ヲ以テ門ヲ開テ、ハラ／＼ト入テ南面ノ方ニ立廻ル程ニ、貞盛、盗人ノ中ニ立交リテ、……。

他の用例の所在をあげる。

九一八、一二一三六、一七三三八、二九一二(全七例)

③ 触覚によるもの

孤例である。

九月ノ下ツ暗ノ比ナレバ、極テ暗クシテ、何ニモ物不見エズ。……(中略)……兄、奇異ト思テ、警□取タル手ヲ搜レバ、吉ク枯テ曝ボヒタル人ノ手ニテ有リ。今昔二七一二二手さぐりてさぐつてみると、まさしくそれは、やせ細つた老人の手であるというのである。

II それ以外の状態(あるいは判断)を表すニテアリ
ニテアリは、原則として、「という状態である」の意を表すが、上に来る体言との関係で八種に分類する。

① 体言が資格・身分等を表すもの

越中ノ守ニテ有ケル時、 今昔一二二二四

右以外の用例の所在をあげる(なお、⑥参照)。

天皇一〇一七、近衛ノ中将二九一二八、殿上人二七一〇、
国守一七一五、二七一四三、二九一〇、二九一二五、二九
一七、諸司ノ允五位二七一八、加賀ノ掾二七一四七、斎
院ノ年預二七一三、清水ノ別当二七一三八、叡山ノ僧二七
一三三、侍二九一二二、(兼家の)隨身二七一三八、神樂ノ
舎人二七一四五、滝口二七一三、下藤ノ子一七四四(全
一九例)

② 体言が年令・出身地を表すもの

其ノ妻モ未ダ年卅ノ程ニテゾ有ケル。 今昔二九一二四
京ノ人ニテゾ有ケル。 今昔二九一二四

右以外の用例の所在をあげる。

丹波ノ國ノ者二九一二三、田舎人二九一六(全四例)

③ 体言が性別・人鬼等の別を表すもの

其ノ子、例ノ人ニテ男子ニテ有リ。 今昔五一二

「女ニテ侍ラバ、得意ニモ不為ジトヤ」今昔一七一四四

其ノ女ハ変化ノ者ナドニテ有ケルニヤ。 今昔二九一三

右以外の用例の所在をあげる(なお、⑥参照)。

男子二二三三、女一七四四、一七四四、人(人類)五
二、行疫流行神二七一、鬼五一、二七一五、物ノ氣
二七一九、靈二七一、精ノ者二七一六(全一三例)

④ 体言が親族関係を表すもの

我レハ、此ノ長者ノ父ニテ有シ時、 今昔二一三八

其ノ佐大夫ハ河内禪師ト云フシ者ノ類ニテナム有ケル。 今昔二七一六

右以外の用例の所在をあげる。

祖一七四四、妻五一、娘九一八、子孫二七一、(全
六例)

⑤ 体言が親族関係以外の人間関係を表すもの

己ガ主ニテ御マシタル人ノ失給ヘルヲ、練フ人ノ无ケレ
バ、此テ置奉タル也 今昔二九一一八

右以外の用例の所在を示す。

師弟九一三六、弟子一七一八、得意二九一七、敵五一六、
(全五例)

⑥ 批評の状態を表すもの

人間(生物)を表す体言が評価・批評を表す連体修飾語を受け

ているものである。また、そのような意味を表す一語の体言もこれに準じる。なお、連体修飾語がなければ、①に属するもの(例、学生、盗人)、③に属するもの(例、男子など)も含めた。全一七例である。

此ノ弁ハ兵ノ家ナムドニハ非ネドモ、心賢ク思量有テ、物恐不為ヌ人ニテナム有ケル。
以下、簡略に用例をあげる。

極メテ武キ者ニテゾ有リケル。 今昔一七一三
知ル人モ无キ人ニテ有レバ、 今昔二七一六

人ハ、心有リ、因果ヲ可知キ者ニテハ有レドモ、

会フ敵无キ者ニテゾ有ケル。 今昔二七一四
古ノ博士ニモ不劣ヌ者ニテゾ有ケル。 今昔二九一一九

糸敵氣ナル男子ニテ有レバ、 今昔二七一五
何ニ事モ不知ヌ僧ニテゾ有ケル。 今昔一七一三三

極テ貴キ聖リニテナム有ケルトゾ語リ伝ヘタルトヤ。 今昔十二一三〇
止事无キ学生ニテハ有ケレドモ、 今昔一七一四四

並无キ兵ニテナム有ケル。 今昔二九一三〇
人ニ被知タル盗人ニテ有ケレバ、 今昔二九一二

誰トモ不被知ヌ盗人ニテナム有ケル。 今昔二九一二

極キ物ノ上手ニテゾ有ケル。 今昔二九一一二

並无キ手聞ニテゾ有ケル。 今昔二九一三〇

吉キ鷹ニテハ有ケレドモ、 今昔二九一三四

无限キ嬌女ニテ有ケレバ、 今昔二二九

これらは単に「鷹」だとか、「者」だとか言っているわけではなく、それぞれ、「吉キ鷹」「極メテ武キ者」だと言っているのであって、「吉キ」「極メテ武キ」の比重は相当大きい。

⑦視覚の状態を表すもの

視覚による感覚的判断を表すものとは別である。ただ、個々の用例の中には、この⑦に附属させたものでも、視覚による感覚的判断を表すものに附属させうるものもあるかもしれない。

日読ノ午ト云フ字ヲ、頭ヲ指出シテ書タルヲ、牛ト云フ字ニテ有レバ、 今昔一〇一九

「午」という字のたての棒が上に突き抜けると、「牛」という字になるという話である。文字に書かないで頭の中で視覚的表象として確認している。

……亦、不榮ズシテ、常ニ枯タル相ニテ有トナム語リ伝ヘタルトヤ。 今昔一二一七

暫コソ人ニテ有ケレ、痛ク責メケレバ、遂ニ狐ニ成テ有ケルヲ、 今昔二七一四一

狐が人に化けていたので、「人」は視覚的にとらえた「人の姿」

の意である。

右以外の用例の所在をあげる。

ヲボロ月夜二七—三七、東ノ獄ノ刃近キ所二九—一六、狩地二九—二七、広キ房二九—四〇、死人二九—一八、(全八例)

⑧断言的狀態を表すものその他

別稿において、「ナリに近いもの(少数)」の存在をあげた。これは、何らかの強調性を備えていたと考えられる。たとえば、少し内容は異なるが、

此レヲ思フニ、極テ哀レニ貴キ事ニテナム有ル。

今昔二一—八

の例は、次の用例の、「也」を「ニテ(ナム)有ル」で強調し、「まさしく……である」の意を表現したものと考えられる。

実ニ、此ヲ思フニ、極メテ貴ク悲キ事也。

今昔一七—三

というのは、

然様ノ物ノ靈ナドハ夜ルナドコソ現ズル事ニテ有レ、真日中ニ音ヲ挙テ長メケム、実ニ可怖キ事也カシ。

今昔二七—二八

の場合など、「……夜分など出現することとして存在するけれど」とは、もはや解せないからである。

強調性が認められるか認められないか分明でないものも、ここで用例の所在をあげる。

余リ事五—二〇、謀一—〇—三〇、可聞キ事二—三四、現ニ我レモ思ユル事二七—二〇、謀タル事二九—一五、辰ノ時計

ノ事二九—三九、糸皮□キ事二九—一三、兄惱ム許二—二三、吉キ程二九—三一、世ノ極キ嘆一〇—七、世ノ騒ギ一〇—一七、極キ損二七—四〇、家ヘ不罷マジキ日二九—一五、二三日不返マジキ所二九—一三、難有キ国一〇—三一、其ノ国ノ歌二七—四五、疵二九—二五(全一九例)

以上の用例数を、項目別、巻別にまとめたものが第一表である。

今昔の全二八巻中、九巻という限られた巻数の集計であるから、他の巻々の数字が入れば、また、多少様相が変わるかもしれない。しかし、第一表のⅠの数値を検討すると、ある傾向が看取される。第一に、Ⅰの数値が三〇と、Ⅱの数値九一に對し、一對三という大きい割合を占めている。つまり、当時の有力な用法であることがわかる。第二に、Ⅰの数値を巻別に見ると、巻二七、巻二九に用例が集中していることがわかる。今昔の文体的傾向は、記録体の問題もあるが、前半に漢文訓読文体の傾向が強く見られ、後半に和文体の傾向が強く見られる。巻二七、巻二九はまさに後半の巻々であり、その巻々への用例の集中は、Ⅰの感覚的判断のニテアリが、和文体の要素の中でも、特に当時の話し言葉の用法の反映であろうことを推測させる。この「(自分の感覚で)確認したが、まさしく……である」の意の用法から、「自分の感覚で」が多用されているうちに脱落して、「まさしく……である」という、Ⅱの⑧断言的狀態その他の項の一部に含まれる「ナリに近い用法」が成立していったと考える。

なお、Ⅰの感覚的判断のニテアリの内訳は視覚によるものが三分の二強の二二例を占めており、聴覚によるもの七例、触覚によ

第一表

計	II 小計	⑧ 断言的狀態等	⑦ 視覚的狀態	⑥ 批評的狀態	⑤ 一般人間關係	④ 親族關係	③ 性・人鬼等の別	② 年令・出身地別	① 資格・身分等	I 小計	③ 觸覺	② 聽覺	① 視覺	卷
三	三	○	○	一	○	一	一	○	○	○	○	○	○	二
六	六	一	○	○	一	一	三	○	○	○	○	○	○	五
二	○	○	○	○	○	○	○	○	○	二	○	○	二	七
四	二	○	○	○	一	一	○	○	○	二	○	一	一	九
九	六	四	一	○	○	○	○	○	一	三	○	○	三	一〇
一〇	六	三	一	一	○	○	○	○	一	四	○	一	三	一二
一五	一二	○	○	三	一	一	三	○	四	三	○	二	一	一七
三四	二五	四	二	四	○	二	五	○	八	九	一	一	七	二七
三八	三一	七	四	八	二	○	一	四	五	七	○	二	五	二九
一二一	九一	一九	八	一七	五	六	一三	四	一九	三〇	一	七	二二	計

るもの一例であった。『源氏物語』のニテアリには、見レバ、聞
ケバの類を伴う用例は発見しえなかったが、

待従がをばの少将とあひはべりしおい人なん、かはらぬこ
ゑにてはべりつる」とありさまきこゆ。 源氏・蓬生

の一例がある。一見、感覚的用法のようでもあるが、源氏には他
に類例が見られず、むしろⅡの⑥批評的狀態を表すものである。
以上、今昔のニテアリのうち、当代的用法として感覚的判断のニ
テアリが多usedされ、それよりナリの用法に近いニテアリに転じて
いったことについて、用例の集計をもとに述べた。

三

断定の助動詞の未然形はナラという語形と一般にされている
が、今昔においては、それは推量表現（仮定表現も）を中心とし

第二表

卷	二	五	七	九	一〇	一二	一七	二七	二九	計
ナラバ	三	三	〇	一	三	一	二	一	四	一八
ナラム	一	四	〇	二	五	四	二	三	三	二四
ナラマシ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一	〇	〇	一
ナラズ	〇	一	〇	〇	一	一	〇	〇	二	五
計	四	八	〇	三	九	六	五	四	九	四八

表注 ム・マシ・ズで他の活用形も代表させる。ナラズ以外、補説例は除いた。

た場合であって、否定表現ではニアラズとニアラの語形を用いる
方が普通である。このニアラズの語形から、たとえば、

ニアラズデアアラズデナシデナシ
に類する経過で、現代語のデナシに到達したものである。

以下、今昔のナリ・ニアリの関係について考察する。ナリが用
いられず、ニアリが用いられる主な場合は、次のとおりである。

- 1、否定表現に用いられて、下に助動詞ズ・ジや助詞デを伴う場合。

- 2、係助詞（時に副助詞）がニアリの間に挿入される場合で、特に係助詞ヤ・カによる疑問表現が代表的である。

- 3、敬語表現に用いられて、アリの部分が尊敬語や美化語に交替する場合。

これら以外の場合は、ナリが普通用いられる。

第二表は今昔九卷のナリの未然形の用例を用法別にまとめたものである。

全四八例中、ナラズは五例、ナラバ一八例、ナラム二四例、ナラマシ一例であって、ナラズの用例は全用例の約一割である。この例外的なナラズの用例をあげる。

然リト可有キ事ナラネバ、
今昔五一一七
加之、新タナル事多シ。
今昔一〇一八

加之、熊・狐・毒蛇等モ皆来テ供養ス。今昔一二四〇

「不意ズ別レヌル事モヤ有ラムズラムト思フガ哀ナルゾ」
今昔二九一三

此猶ハ、極カリケル、我が為ノ此ノ不世ヌ財ニコソ有ケ
今昔二九一三

第三表

卷	二	五	七	九	一〇	一二	一七	二七	二九	計
ニアラズ	一四	二四	一〇	二〇	三一	三三	*一二	*一七	***三三	一九四
ニアラジ	〇	一	一	〇	〇	〇	二	一	〇	五
ニアラデ	一	一	〇	〇	二	〇	〇	三	五	一二
ニナシ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一	〇	一
ニアラバ	〇	〇	〇	*一	〇	〇	〇	〇	*一	二
計	一五	二六	一一	二二	三三	三三	一四	二二	三九	二二四

表注 ズ・ジ・ナシで他の活用形も代表させる。*印はアリの部分が敬語化されている用例一例を含むことを示す。

五例いずれも慣用的表現に用いられ、一字一音節表記のナラは第一例のみである。第二表のナラバ、ナラム、ナラマシのナラはすべて一字一音節表記である。ナラズの用例が例外的であるのは、ニアラズの用例の多数であることを見れば、自明のことである。

一見してわかるように、全二一四例中、ニアラズ一九四例と大半を占めている。さらに、否定表現のニアラジ、ニアラデ、ニナシ（二七—三）まで含めると、二一二例になる。残り二例はニアラバのアラの部分が敬語化されたもので問題がない。なお、ニナシはニアラズのアラズがナシと交替した語形である。

第三表でニアラムの例がない点、筆者としては、次のような処理によっている。

第一に、ニ有ラム・ニ有ム型はアルラムとも、アラムともよめ

[90]

*二九一四四（八例）

また、次の「有ム」も「アルラム」とよんだ。

何ニ構ルニカ有ム、

今昔五—三

次の用例は、別稿では表に算入したが、日本古典文学大系本、日本古典文学全集の解に従い、ニを格助詞、アリを本動詞として除外した。

其レヲ不知デ、近ク打寄テ、手便ニ有ラムニハ（Ⅱ手の届

く所にいる時は）、当ニ不取付ヌ様ハ有ナムヤ。

今昔二九—一九

なお、次の二例は本動詞の用例である。

亦、荊州ノ鎮守ニ有リ。

今昔九—二一

其ノ器（Ⅱ立場）ニ有リト云フトモ、

今昔九—四一

ナリ活用形容動詞の場合は、ナリとニアリの関係が、今昔の場合、前掲の断定の助動詞の場合の1を除いた、2、3の二項のみとなる。1が形容動詞にも該当するのは、かなり後の時代である。今昔九巻のうち、例外となるものを二例発見した。

何ゾ、甚ダ、理ニ非ズシテ苦ヲ受ケム」 今昔九—一七

亦、老僧ノ、形凡ニ非ザル、来テ、一枚ノ文ヲ授ク。

今昔二—三四

2の係助詞との関係については、助動詞も形容動詞もナル・ナレの形が結びとなることは原則として（少）ない。連体形の場合は筆者は発見しておらず、已然形の場合は多少ある。一例ずつ用例をあげる。

此コソハ天河ノ水上ナレ。

今昔一〇—四

類例が二九一二五にある。

然レバ由无キ鏡ヲ見付テ、異銀サヘヲ加ヘテ被取ニケル事
コソ損ナレ。

今昔二七—二七

終止形はナリの形が普通である。助動詞の場合は前述した。形容動詞の次の二例の場合、有りは本動詞で、「声がかすかに聞える」の意である。

人ノ叫ブ音露ニ有リ。

今昔二—一三

実ニ法花経ヲ読ム音露ニ有リ。

今昔二—三—

以上、断定の助動詞ナリとニアリはその用法上、大勢として相補分布が見られ、特に未然形ナラは推量表現（仮定表現）を中心に用いられ、ニアラは否定表現を中心に用いられることを述べた。形容動詞ナリ活用の場合、今昔の場合、そのような傾向はない。

使用テキストは次のとおりである。

『今昔物語集』

日本古典文学大系本（山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄四氏校注）

日本古典文学全集本（馬淵和夫・国東文麿・今野達三氏校注・訳）を参照。

池田亀鑑氏『源氏物語大成』

なお、本稿作成にあたって、昭和五十七年度特定課題研究助成費（早稲田大学）の交付を受けた。記して謝意を表する。